

五 評 自 註 歌 集

赤 土

山 口 茂 吉 著

佐 藤 佐 太 郎 評

五評白註歌集

赤　　土

山口茂吉著

(作譯(天)評)

講　談　社

赤土 歌集註自評互



昭和二十三年十月二十日 印刷
昭和二十三年十一月一日 發行

定價 二〇〇円

著者 山口 茂吉

發行者 東京都文京區音羽町三ノ一九
尾張眞之介

印刷者 東京都千代田區神田錦町三ノ一
井關好彦

印刷所 東京都千代田區神田錦町三ノ一
大同印刷株式會社

發行所 東京都文京區音羽町三ノ一九
株式會社 大日本雄辯會講談社

日本自由出版
協會會員
振替口座
東京三九三〇
電話(33)代表 一三一六番
九段

凡 例

一、本書は著者の第一歌集赤土に對し、評者が歌集に批評を書入れたものを基として、著者が自註を施したものである。

一、本書では作品を總べて年度別にして編集し、昭和十一年より昭和十五年に及ぶ短歌作品四百三十首を収載した。

一、短歌作品の一連として分量の多いものは翻讀に便ならしめるため各篇毎に番號を附し、適宜に分割した。

一、作品數首乃至十數首の次に段を低くして小活字で示したのが評者の言である。

一、次に九ポイント活字で記述したもの並に○の中に數字を示し、作品と批評とを對照せしめて記述したものが著者の自註である。

一、本書では鑑賞上の便を思ひ、連作歌篇の順序をも若干正して置いた。

一、互評自註歌集としての本書は、佐藤佐太郎著歌集歩道（批評は赤土の著者がした）と、いはば對をなすものである。

歌自互
集註評

赤土目次

昭和十一年

鵠

沼

.....

五

嚴

冬

.....

九

童

馬山房

.....

一

陽

春

.....

一三

富

士山上吟

.....

一五

春

山北町

.....

一四

折

に觸れ

.....

二九

霧

積溫泉

.....

三一

冬

の海

.....

三四

昭和十二年

2

昭和十三年

霜

枯

八〇

魚附海岸

八五

きさらぎ

八七

石神井

九〇

犬を悲しむ

九三

茗荷

九六

麥秋

九七

葛飾水源

一〇〇

砂の庭

一〇三

朝霧

一〇五

深大寺附近

一〇八

武蔵野小吟

一一〇

4

一一七

1110

一一一一一

二二五

一一一

一二九

三三三

一一一

一三六

一三八

四〇

一四三

昭和十五年

大	早	春	寒	冬	海	冬	冬	北	落	野	神
島	春	寒	霽		邊	霽	田	の	葉	火	田
一七四	一七一	一六九	一六七	一六四	一六二	一五九	一五五	一五二	一五〇	一四八	一四五

火口		一七六
ふくろふ		一七八
暗黒		一八一
椎の花		一八五
退け時		一八八
七月		一九一
夏雲		一九三
八月		一九六
新秋		一九九
餘響		二〇一
評後	佐藤佐太郎	二〇三
後記	山口茂吉	二〇四

裝釘 鹿兒島壽藏

赤
土

山口茂吉

昭和十一年



鵠沼

1 藤の實の落ちしづみたる庭池は片瀬川より潮差しそめぬ

2 水門の網扉に潮のいきほひて流れ來りし埃吸ひつく

3 林泉山は木高くなりて見えをりし砂丘も今はかくろひにけり

4 片瀬川に沿ひてゆたけき林泉のうち池に夕の潮満ちたり

5 鵠沼くけ沼の小松林に聞こゆるは砂吹きたまるかすかなる音

6 庭池にうち靡く藻のありありと過ぎにし人の現うつし目めに見ゆ

7 松原と田居たみをくぎれる片瀬川の夕づくながれ飽かず見て居り

8 林泉山しんせんの高たかきに立てば川下かはしもの水ひとところ光差したり

1 二句までは單なる屬目といふ程度で輕い。勿論下句が眼目ではあるが。

2 下句やや通俗ならん。

3 三四句いくらか的確を欠く。

4 下句巧まずして而も感動がある。

6 「現し目」は細かいところに工夫のある作者の特色が出てゐる。

7 結句がもう一息といふ感じなり。

この「鵲沼」一聯の歌を歌集「赤土」の巻頭に置いたのは、編輯の都合上さういふ順序になつたので偶然ではあるが、鵲沼は私の非常に好きな地でもあり、また、私が始めて歌を作つてアラギに載せてもらつたのも鵲沼の歌であつて、まことに自分に取つてはなつかしい處なのである。この一聯は佐藤君の批評でもあまり出来がよくない事になつてゐるが、自分にはさういふ^{あひ}訣合があつて、稚拙ながらも棄てがたい氣持である。

① 佐藤君の云ふ通りやや輕いかも知れないが、下句が眼目であつて庭の池へ夕潮の差して來るところに感動があるわけである。

② 結句はもう少し何とかしたかつたが、どうにもならなかつたことを想起する。その他、取り立てて自分に云ふところがない。

③ これも自分だけの感動であつて、人を同感せしめることが出来なければ何にもならないが、一二句あたりには自分ひとりの深い感動があつて出来たものである。